慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評: 小倉康嗣著 『高齢化社会と日本人の生き方 : 岐路に立つ現代中年のライフストーリー』 慶應義塾大学出版会、2006年
Sub Title	
Author	小林, 多寿子(Kobayashi, Tazuko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.125- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：小倉　康嗣著

『高齢化社会と日本人の生き方―岐路に立つ現代中年のライフストーリー』
慶應義塾大学出版会、2006年

小林　多寿子

本書は、高齢化の進む日本社会において主題化される問題、とくに人生後半をどう生きていくのかという私たちすべてに問われる「生き方」の問題に鮮明に焦点を合わせ、まさに渾身の力で描き出した力作である。著者の真摯な学問的姿勢、出会った人びとをまるごと理解しようとする深いまなざし、自らの身体に刺さった「棘」をカミングアウト・ストーリーとして記しつつ「生きる」ことと不可分であるという著者の社会学観、それらは、ほとばしりでる熱い思いと勢いある筆の力にも押されて圧倒的な説得力をもって読者に迫ってくる。これほど迫力ある社会学の書物がいったいいくつあるだろうか。読者となった社会学者は、豊饒な学問的成果からも、研究者としてのまっすぐな姿勢からも、さらに描き出された重厚なライフストーリーからもおおいに触発されるにちがいない。このような傑出した作品を上梓された著者に心から賞賛を贈りたい。

本書から伝わってくるのは、調査研究に対しての情熱と真摯さだけでない。評者が専門とするライフストーリー論の観点からみると、質的研究の作品として細部にまで配慮の行き届いた構成の誠実さ、なによりも実験的な、あるいはむしろ挑戦的なといったほうがよい作品化の試みへの意欲、いずれも驚くばかりである。細部にまで至る配慮とは、調査プロセスを詳細に開示し、調査協力者に出会うまでの経緯、そしてインタビューの依頼状や再調査の際に事前に語り手に送った初回のインタビュー資料までも巻末に掲載し、語りの場が産み出されるプロセスを詳細に記述したところをさす。挑戦的な試みとは、書籍として大部になることを恐れずに、三人の現代中年のライフストーリーを圧縮することなく、聞き手のあいづちまでも含めて対話形式で存分に掲載したこと、その豊かなライフストーリーを挟むように前に精緻な理論的視角、後ろに筆者の解釈を配置し、語り手と聞き手の構築する世界に読者も引き込んでいく手法にある。これらの点には語りの産出プロセスを開示することによってライフストーリーの信頼性と妥当性を担保することが意図されたはずであるが、ライフストーリーの作品化に新たな可能性を示してくれ、その点でも高く評価される作品である。ライスストーリー論の立場からとくにつぎの二つの点に注目したい。

ひとつは本書の「再インタビュー」という手法である。ライフストーリー・アプローチにおいては調査対象者の経験をより深く理解するために複数回インタビューをおこなうことは当然のようになされている。しかし本書の研究では、単純にインタビューを重ねていくのではなく、三年という時間を経た二回目のインタビューは「生成的理論」に裏打ちされたより密度の高い

「新たな了解の生成」を目指したものであった。

著者は、「再インタビュー」についてたとえば次のように述べている。一回目のインタビューにおいて、語り手は「人間の論理で割り切れない部分」あるいは「人間がどこから来てどこへ行くのか」という意味層へまなざしは向けながら、だが、安易に目の前の目的を求めるようなことはしない「不作為」という状態にとどまりつつ、何かを照射しようと模索しているように感じられたという。その照射の先とは「簡単に見えてくるような性質のもの」ではなく、「なかなか言語化しえないもの」のようでもあった。三年の月日を経て何が見えてきたかを聞きたかったという。「そんな思いを自分のなかで発酵させながら」、三年後に「再インタビュー」に臨んでいる。

「再インタビュー」の方法が他のたんなる複数回インタビューとは峻別される点として「発酵」という言葉が重要であろう。研究者側の解釈とはただトランスクリプトしたものを読み込むだけで得られるのではなく、研究者自身の内的経験として時間をかけて醸成されるものであり、聞き手と語り手の相互作用の場とはそのような「発酵」のプロセスをも包含することを具体的に示してくれている。さらに「発酵」によって得られた解釈を語り手へ投げかけてフィードバックし、そのうえで「互いの解釈をすり合わせていくプロセス」も分厚く記述されている。筆者は、このような研究の知見を得るにいたったプロセスを重視し、＜経験の実践のプロセス＞として開示し「作品」として提示する実験的な手法を開拓している。

いまひとつ、このようなライフストーリーの共同制作性をふまえた提示のスタイルにもおおいに注目したい。昨今、ライフストーリー・アプローチをとるものにとっては、インタビュー場面を記しながら、トランスクリプトをもとに聞き手と語り手双方の語りを詳細に示していくことは標準になりつつあると思う。しかし本書で特筆されるやりかたは、たんに語り口を活かすというレベルにとどまらず、著者が「実験的試み」と述べるような語り手と聞き手の「対話実践のなかでライフストーリーが生成されていくプロセス」、「相互了解が得られていくプロセス」、そして「私が感受したこと」を語り手に投げかけて、さらに展開されていく対話を存分に盛り込み、「互いの解釈をすりあわせていくプロセス」を組み込んだライフストーリーの提示法にある。具体的には、調査研究者である著者自身の「働きかけ、発話や問いかけの意図・動機」、そして「わたし自身が調査協力者の語りから観じたこと」も「最大限露わにする記述」に加えて、「調査者である私のインタビュー場面での位置どりや経験の仕方にまで読み手の注意を喚起する提示の仕方」が意識化されている。読者による読まれ方までも織り込み済みで調査過程を描写し、「調査研究する主体である「私」がいかにして生成され、また高齢化社会における自己の位置性をどのように認識し、一連の調査過程にいかなる自己を持ち込んで臨んだのか」と問いかけて、調査過程のなかで調査研究の主体としての「私」の立ち位置を明確に示そうとした点において、この作品化のポリシーは先駆的な試みといえるだろう。

ここにあげた実験的な試みは、結果としてエイジング・プロセスという研究テーマに適った方法となり、語り手の「生き方」を描き出すのに成功していると思う。とりわけ、「蓄積され

てきた経験」、労働観や「老い」観や人生態度、このような「言語化しえないもの」をとらえようとして、「根っこの経験」や「体が欲する」次元が鮮やかに描かれているが、聞き手/調査研究者の解釈を語り手/調査協力者にフィードバックしてすり合わせていくプロセスによってはじめて引き出せたものである。そして「個人の生涯という時間的パースペクティブ」から読み解いてこそとらえられるエイジングの諸相がていねいにかつ充溢に論じられている。

近年、ライフストーリー法において対話的構築主義が唱えられているが、実際の研究成果でいかにその観点を効果的に示しうるのか、いまだ試行錯誤が続いていると思う。たんにインタビューの対話性を提示するだけではなく、人間をホーリスティックにとらえ記述するのにどのようなやりかたが可能なのか、そして研究主体の立ち位置をいかに示し、研究の知見の生成過程をどのように明示化できるのかと自問しながら模索中のものにとって（もちろん私自身も含めて)、本書において示された実験的試みは示唆に満ちたインパクトを与えるにちがいない。

このような本書にあえて問いを出すとしたら、最後の第八章において論じられている＜＜経験＞のミメーシス的ジェネラティビティ＞という概念のわかりにくさと本書のタイトルにあるかもしれない。評者にとっては＜＜経験＞のミメーシス的ジェネラティビティ＞をエイジング論に置いたときにどのような概念としてとらえたらいいのかいまひとつ理解できなかった。＜＜経験＞のミメーシス的ジェネラティビティ＞は、「社会化」を世代継承性として再定義する文脈に置かれうることに異存はないが、エイジング・プロセスのなかでどう説明されるのかさらに問うてみたい。現代の高齢化社会の問題は、「高齢者」という特定の人びとの限られた問題ではなく、私たち全世代が直面せざるをえない「生き方」の問題であり、「下降」「有限性」「喪失」「依存」「弱さ」「非合理性」という生の局面を含む「老」「病」「死」へ向かう人生後半をいかに意味づけるかが一人ひとりに問われているという著者の前提に双手をあげて賛成である。その前提のもとで生涯にわたるエイジング・プロセスの生成に＜＜経験＞のミメーシス的ジェネラティビティ＞概念がいかに布置されるのかがまだ見えてきていない。

それから、三人の現代中年という調査協力者、そして著者という調査研究者、双方の「社会から外れた経験」を強調とすることの問題はないだろうかとも問いたい。50 代で早期退職により無職を選んだ男性、20 年農協に勤務しフリーになって地域活動に携わる 50 代の女性、債務、離婚、脳梗塞による障害という重荷を背負った 60 代の男性、たとえばこのように描写するなら、もしかしたら現代日本において少数派かもしれない。しかし、本書のタイトルに「日本人の生き方」とした意図はなんなのか、三人の現代中年のライフストーリーで描き出し得たものをいかに「日本人」にまで接続させていくのか、その点の論述は十分になされているとは言い難い。D．プラースの名著『日本人の生き方』に大きな影響を受けていることは想像に難くないが、評者にとっては阿川さん、馬場さん、千葉さんの個性あふれる個々の「生き方」と「日本人の生き方」とのあいだを結ぶ著者の論理の展開を問うてみたいと思う。

しかしこのように問いかけながらも、他方では評者の読みが浅いのではないかとも躊躇されるのは、それほどに緻密な大作であるからである。これから沸き起こるであろう本書への反響

から評者がむしろ一層学ぶことになると予感している。

［本体価格 5,880 円］

（こばやし　たずこ　　日本女子大学人間社会学部）